

社会科

協議主題「学ぶ意欲を持ち、追究していく生徒の育成②」

提案者 田崎 義久 浦 達志

キーワード 深い学び ペア学習 東日本大震災 帰還困難地域 新たなまちづくり

1. 社会科の「深い学び」

平成27年8月にまとめられた中央教育審議会の論点整理では、育成すべき資質・能力が3つの柱で整理された。①「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」、②「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」。次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに質や深まりが重要であるとされ、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」についても検討が重ねられた。必要な資質・能力を身に付けていくことができるように、3つの視点に立って学び全体を改善し、学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することが求められている。

3つの視点は、①「習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか」、②「他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか」、③「子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか」である。アクティブ・ラーニングの視点の1つである「深い学び」については、教科固有の見方・考え方を身につけさせる活動があるかどうか、「深い」の中身になると言われている。

本校の「深い学び」の概念は、「習得した知識や技能、思考力・判断力・表現力等を活用し、その過程を楽しみながら、意欲的に教科の本質に迫る学び」と設定した。また、本校では「深い学び」の中に「対話的な学び」と「主体的な学び」が包括されていると考えている。

本校では社会科としての目標を以下のように設定している。「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察できる生徒の育成」である。これは現行学習指導要領の中学校社会科の基本的なねらいにかかわるものである。教科の本質に迫る学びは、まさにこの目標にあたる部分である。しかし、教科の本質に迫る方法や内容は、本来社会科担当教師一人ひとりによって思いや考え方も違ってくるものである。本校社会科では「深い学び」の中で、地理的分野・歴史的分野・公民的分野固有の見方・考え方や基礎的知識・技能を活用させたい。そして、自分なりに考えそれを伝え、また異なる考え方を受け入れ自分自身を変えていき、将来にわたって学ぼうとする意欲、社会に参画していこうとする姿勢を育むようにしていきたいと考えている。

子どもたちが活躍する10年後、20年後の社会は、人口減少による社会構造の変化、エネルギー活用をめぐる諸問題や地域社会を創生していくこと等、様々な課題に直面することが予想される。「深い学び」の中で育むその姿勢が将来、課題を解決していく場面できっと活かされるだろう。そこで、中学校3年間の社会科学習の中でも、中学生には解決が難しい現実社会にある課題に向き合う教材を取り上げていきたい。問題意識を高め、社会の課題を見つめながらも生きる未来に希望を見出せるような指導の工夫を考えていきたい。さらに本校の「深い学び」概念の中には、「その過程を楽しみながら」という一節がある。社会科本来の意味やおもしろさを感じさせたいと願っているが、現実にはこれも難しい一面もある。学ぶことが楽しくなければ、社会科を好きにさせることはできないことも肝に銘じて、本校社会科として「深い学び」につながる実践を積み重ねていきたい。

2. 「社会科の研究主題」設定の理由

社会科では昨年度からの研究主題に引き続き取り組み、「学ぶ意欲を持ち、追究していく生徒の育成②」とした。これまで本校社会科では、学び方や学び合いを大切にされた指導に力を入れてきた。思考力・判断力・表現力を育成する有効な学習方法の1つとして、ペア学習→グループ学習を授業のヤマ場に積極的に導入し、生徒の意思決定を学び合いの場面により多く取り入れていくことを考えてきた。隣